とやま、祭り彩時季【七】

春から夏にかけての祭礼と行事　写真・文／木原盛夫

とやま、祭り彩時季【七】

春から夏にかけての祭礼と行事　写真・文／木原盛夫

CONTENTS

○売比河鵜飼祭・・・・・・・・・・・・4P
○越中だいもん風まつり・・・・・・・・10P
○御田植祭・・・・・・・・・・・・・・13P
○国泰寺の開山忌法要・・・・・・・・・25P
○床鍋の虫送り・・・・・・・・・・・・33P
○除蝗祭（じょこうさい）・・・・・・・39P
○高瀬神社の祈年穀祭・・・・・・・・・45P
○花しょうぶ祭り・・・・・・・・・・・51P
○御印祭・・・・・・・・・・・・・・・60P
○じんじん祭り・・・・・・・・・・・・72P
○厄や穢れ、眠気を祓う夏の行事
・祇園祭りに登場する牛頭天王と・・・79P
　スサノオノミコト
・夏越の大祓と蘇民将来・・・・・・・97P
・ネブタ流しニブ流し・・・・・・・・107P
　流した穢れは何処に辿り着くのか？
【コラム】富山に残る行基の足跡・・・124P

◯売比河鵜飼祭（めひかわうかいさい）

５月下旬に開催される売比河鵜飼祭。万葉の歌人で知られ、奈良時代の越中国守だった大伴家持が巡察した際に売比河（神通川の古い名前）に立ち寄り、そこで見た鵜飼の様子を詠んだ和歌「売比河の　早き瀬ごとに篝(かがり)さし、八十伴の男は鵜川立ちけり」にちなんで催されるイベントで、平成１０年（１９９８年）から続いている。

大伴家持が鵜飼を見たのは、鵜坂神社の裏手に神通川が流れており、その辺りだという。神通川の土手と鵜坂神社の境内に家持の歌碑が建立されている。

５P上：鵜坂神社の境内にある大伴家持の歌碑。
５P下左：神社の裏手を流れる売比河（神通川の古い名前）。
５P下右：川の土手に建立されている大伴家持の歌碑。

6P：会場は、富山イノベーションパーク横にある田島川の両岸。写真は鵜坂小学校6年生による「さんさい踊り」。7P上左：マスコットキャラクターの「うーちゃん」「かいくん」。7P上右：マジックショー。7P下：巫女による神楽「浦安の舞」。

イベントは１７時からスタート。オープニングは地元の鵜坂小学校の６年生による「さんさい踊り」。さんさい踊りは富山市梅沢町の円隆寺で毎年７月に営まれる祇園会に、子供や女性たちが集まって踊られる盆踊り。

歌詞の中に「おどるまいか　見まいか　おどるまいか　見まいか　島の徳べえの　嫁見まいか」とあり、ここに唄われている”徳べえ”こと岡崎徳兵衛の屋敷が、この地にあったようだ。

さんさい踊りに続いて開会セレモニーが行われ、来賓の挨拶の他、２０１７年は売比川鵜飼祭２０周年を記念して製作された鵜坂小学校のマスコットキャラクター「うーちゃん」「かいくん」が紹介された。

子供たちのダンス、津軽三味線、巫女神楽、バンド演奏などのアトラクションに続いて、１９時５０分から鵜飼が始まる。堰き止めた川の端から端を３往復ほどして実演。篝火を下げた舟に乗って行う川舟漁と、歩きながら行う徒歩（かち）漁を披露した。

◯越中だいもん凧まつり

庄川の河川敷にある大門カイトパークで、五月中旬の日曜日に開催される、越中だいもん凧まつり。１９７９年５月の「国際児童年」を記念し、子どもの健やかな成長を願い、町が主催して行ったのが始まりだという。

８時２０分からオープニングステージ、８時３０分に開会式が行われ、９時から「親子連凧揚げ」「全国有名凧揚げ」「自由参加凧揚げ」「コマーシャル凧揚げ」「地元自治会大凧揚げ」など１６時頃まで趣向を凝らした凧揚げが繰り広げられる。

会場までは、あいの風とやま鉄道「越中大門駅」から徒歩２０分ほどだが、当日は駅と会場を無料で結ぶシャトルバスも出ている。

１１－１２P：競技会場のまわりに、出場団体のテントが並んでいる。連凧や巨大な凧の他に、愛好家が作る自転車を女の子が漕いでいる形の凧など一風変わった凧も揚がっている。

○御田植祭

御田植祭とは豊作を祈って行われる田植えの神事。実際に神饌田で田植えを行なうものと、予祝行事として豊作の演技を行なう田楽（田遊び）がある。

５月になると、子供たちにお米作りの大変さや収穫の喜びを教える田植え体験を兼ねた御田植祭が、県内のいくつかの神社で催される。

富山市新庄にある新川神社では「田んぼ学校」を毎年開いており、５月に御田植祭、９月に抜穂祭・稲刈りがあり、収穫したお米は１１月２３日の新嘗祭に献上される。そして１２月に稲藁で正月飾りやしめ縄を作った後、収穫したお米でおにぎりを作って試食する。

高岡市の有磯正八幡宮では境内にプランターを並べた神饌田を造り、ここに地区の子供たちが苗を植えて御田植祭を斎行する。

１４P上下：新川神社の御田植祭。祭典では早乙女、田男姿の子供たちが伝供で神饌を供える。祭典が終わると神職、楽人に先導されて境内の隣りにある神饌田へ向かう。

１５－１６P：農家の方に教わりながら苗を植える子供たち。

１７P：５月の御田植祭で植えた苗が実った、新川神社の神饌田。

１８P上：９月に行なわれる抜穂祭で、稲刈りをする子供たち。

１８P下左：稲刈りの後、参集殿で昔の道具を使った脱穀、精米を体験した。

１８P下右：１２月には収穫した稲藁でしめ縄作りやしめ飾り作りを体験し、その後、収穫したお米をおにぎりにして試食する。

１９P：境内にプランターを置いて造られた、有磯正八幡宮の神饌田。

１０６６年に京都の賀茂神社から勧請し創建されたとされる射水市の加茂神社では、６月最初の卯の日に、豊作を願って御田植祭が行われる。同神社には平安時代の京都の文化を伝承した行事が残っており、この御田植祭も他所では見られない独特な祭典になっている。実際に苗を田んぼに植えるのではなく、境内に設けた仮田に苗を植える真似をして豊作の予祝をする富山では珍しい田楽芸だ。

神事は午前１０時から始まるが、その前に社殿では氏子の方々や近くの小学校の児童らが神事で使う真菰（マコモ）の神様と、真菰の大男を製作する。

２０P上下：子供たちに真菰の神様の作り方を教える野上宮司。真菰の大男。２１P：出来上がった真菰の神様を仮田に運ぶ。２２P上中下：御旅所にご神体を安置して祭典。仮田を柄振りでならす。宮司が後ろ向きで糯米の苗を並べる。

祭典では祭神（玉依姫命）を先頭に、三方に乗せた真菰の大男や糯米の苗を境内に設えた仮田に運ぶ。氏子が柄振りで仮田をならし、野上宮司が後ろ向きで苗を植える真似をする。苗をきれいに並べ終えたら、宮司が後ろ向きになって真菰の大男を氏子、参拝者のいる方へ投げる。真菰の大男は豊作を約束する縁起物といわれ、みんなが競って奪い合う。この加茂神社の御田植祭は、県の無形民俗文化財に指定されている。

ところで、昭和６１年発行の『ふるさとの風と心　富山の習俗／富山新聞社編』（桂書房）には、＜昔は各地区から選ばれた力持ちの大男たちによってご供田一反歩の土を起こし、田植えが行われた。地区民総出で見物に集まり、節おもしろく田植え歌を合唱して祭りが行われた。江戸時代初期ごろまで続いた。それが仮田に変わったとき、”大男”がマコモの神に変身したと伝えられる。また、お田植え祭りには倉垣庄内の各村から早乙女が集まり、田植え歌をうたいながら田植えをしたという記録も残っている＞と記されている。

○国泰寺の開山忌法要

開山の祖である慈雲妙意の威徳を偲んで、命日の６月３日に合わせて毎年２日と３日に行なわれる、臨済宗国泰寺派大本山・国泰寺の開山忌法要。

大方丈（本堂）での読経に和して奏じられる尺八や、開祖の坐像が祀られている開山堂まで虚無僧が尺八を奏でながら境内を歩く塔参（とうさん）で知られ、地元のニュースで見るその姿は初夏の風物詩にもなっている。

国泰寺と虚無僧の繋がりを詳しく記した記事は見当たらないが、虚無僧とは普化宗の僧だそうで、普化衆は臨済宗の一派ともされていることが、臨済宗の国泰寺と繋がるのだろうか。

国泰寺で虚無僧行列を行なっているのは同寺を本拠地に研鑽している尺八団体「妙音会」で、毎年３０人ほどが参集する。

２６P上下：大方丈での開山国師宿忌。

２７P：開山堂までの塔参。２８P上下：開山堂での読経。読経と外に並んだ虚無僧の尺八の音色が調和する。２０１８年の初日は大般若会中祈祷、御説教、塔婆供養、開山国師宿忌、塔参、２日目は観音堂諷経、御説教、とっぴき奉納、塔婆供養、塔参などが行なわれた。

国泰寺は１２９６年、慈雲妙意が二上山に建てた草庵が始まりとされる。妙意は草庵を訪れた孤峰覚明（臨済宗の僧）の勧めで普化宗の祖、心地覚心に師事する。１２９９年、二上山に戻り草庵を寺として摩頂山東松寺と号した。

１３２８年、後醍醐天皇から護国摩頂巨山国泰仁王万年禅寺の号が下賜される。

明治維新では廃仏毀釈の余波を受けたが、山岡鉄舟の尽力で修復を果たした。

２９P：総門。３０P：山門と両脇に立つ仁王像。

３１P：大方丈と月泉庭（手前）。

３２P上：開山堂。

３２P下左：開山堂に祀られた慧日聖光国師尊像（慈雲妙意禅師）。

３２P下右：利生塔（三重塔）。

○床鍋の虫送り

虫送りは農作物につく害虫を追い払い、豊作を祈願する行事。県内では御幣を立てた直系１m、長さ８mほどの大松明に火をつけて引きまわす氷見市床鍋地区の虫送りが有名で、６月の第１土曜に行なわれる。昭和２７～２８年頃より農薬の出現や子供の減少で廃れたそうだが、平成２年に復活して今に至っているという。

床鍋地区に伝わる由来では＜虫送りは、田に発生する「ウンカ」「イナゴ」「ドロムシ」などを、怨霊のしわざと考え、大勢の人が集まり、松明を燃やし、鉦や太鼓などを鳴らして畦道を歩くというもの。床鍋地区では百三十年前から行なわれている民俗行事であり、子供たちが松明を引き「ドロムシホーイ」「ドロムシホイ」と話ながら田をまわるという行事（神事）は今日まで受け継がれてきた。この日だけは、子供たちに火の扱いが許された日であり、火の恐ろしさや大切さを教えた日でもあります＞とされている。

藁や杉の枝を竹で包み、藤の蔦で縛った巨大な松明が集落の中央にある広場に置かれ、１８時半頃から神事が行なわれる。そして辺りが薄暗くなった１９時頃から、子供たちが中心になって松明が引き、大人が横と後ろについて方向を調製する。

T07-020

and more...